

## 第2回研究発表会 発表要旨

国際文化学会は1997年10月24日に本学において、第2回研究発表会を英語英米文学会および人間科学会と共催した。多数の会員および準会員を前に、4名の準会員と柳父章文学部教授ならびに中井紀明文学部助教授の研究発表がなされ、活発な議論を呼び起こした。研究発表をした準会員のうち3名が国際文化学専攻を修了しており、さらにそのなかの2名から発表要旨の提出があったので、それらを以下に記載する。

### 日本語の人称代名詞とフランス語の 人称代名詞の比較

竹 中 雅 基

日本語の人称は多様なバリエーションを含んでいる。このことはたとえば、自分という存在は、どういう立場のものなのかということが重要な点なのである。この概念を支えているものは日本語の対人関係における用法の風習なのである。この規則性を構築しているものは目上と、目下という対立概念なのであり、人称を規定する要素である。

さらに、二人称においては、いわゆる人称代名詞は限定的な用法でしか用いることはできない。「てまえ」、「きさま」、という表現は相手を敬う表現だった。それが後には相手を罵るような表現になった。

いわゆる三人称についての考察をしてみよう。日本語には三人称代名詞は存在しない。日本語では、指示代名詞を以て充当してきた。三人称代名詞的な用法をすることも確かだ、力のあるものが弱いものに向かって「彼」「彼女」を用いることがある。彼、彼女という表現は、心理的に遠い存在であり、

客観的に述べる事の多い言葉である。それ故に教科書のなかでは違和感の無い存在であるが、会話のなかでは、違和感のある存在になってしまう。

「わたし」や「きみ」「あなた」という言葉は日本語の人称の中で一部しか代名詞として受けることができない。このことが代名詞でないことを如実に表している。西洋語の人称代名詞は固有名詞の反復を防ぐための代名詞である。フランス語なら、ある人の固有名詞を人称代名詞 *je* や *tu* 等で受けることが可能である。しかしながら日本語ならば学生が大学の教授に向かって「きみ」または「あなた」を用いることは不可能である。一方、フランス語では大学の教授に向かって *vous* で一般的には話しかけ、場合によっては親近感をこめて *tu!* で話しかける事すら可能である。

日本語の文法は西洋語の文法を手本として構築されてきた。その西洋語の文法では主語があつての述語であり、人称代名詞をもって先に話題にのぼった人物を表すのである。フランス語は、個々の文に主語と述語という主従関係が成立しその主従関係を合理的に行なうための人称代名詞である。

文明開化という名の西洋からの文化的侵略によって、日本語の文法教育の手本となるべきものが西洋語であつた。このことが日本語で、人称代名詞という架空の物を創造した要因である。

## 小河一敏の罷免について

伊 藤 健 一

初代堺県知事小河一敏研究で通説的地位にある山中永之佑は、小河を以下のように評価する。第一に、小河は半封建的存在である。また、人民の突き上げがあつたため、見せかけの「仁政」を実施せざるを得なかった。第二に、その「仁政」も初期明治国家での近代化政策の推進役であつた「開明派」官僚からみれば「独断専行」にすぎないので、これが決定的対立となって罷免されたという。果たして妥当な判断か。